

特別講演

作業を基盤とした実践のメリット・デメリット

齋藤 さわ子

茨城県立医療大学保健医療学部作業療法学科 教授



作業療法特有の視点である「作業中心」の概念に沿えば、作業を基盤とした実践を行うこと、つまり、作業を用いて、心身機能や作業遂行技能の向上・維持する介入を行い、作業ができるようにすることは作業療法実践において前提であるといえる。ここでいう「作業」とは、その人自身が、本来の生活で行う「したい、することを必要とする、することが期待されている活動」とする。

作業療法士にとって、作業を基盤した実践のメリットは、手短かに述べれば、専門家としてすべきことと、していることが一致するので、作業療法士としてアイデンティティーに迷うこともなく、自分のしていることがすべきことと一致していない理由を説明する必要もなく、患者をはじめ公衆に他職種と混乱されることなく、その特有性と有用性を誇りに持てることである。さらに、多くのエビデンスが、作業を用いた治療・介入効果が、他の治療・介入よりも高い可能性を示しており、適切な作業を基盤とした実践は、作業療法士は根拠に基づく実践をしていることにもなる。

こんなに良いことばかりなのに、どうして作業を基盤とした実践を作業療法士はしっかり行えないのであろうか？作業を基盤とした実践は、作業療法士という専門家としてはメリットが大きいですが、作業療法士が何の専門家であるかを意識していない、あるいは作業を用いる知識や技術を身につけていくつもりのない作業療法士には、作業を用いることは様々なデメリットがある。そのデメリットが大きい場合、作業を用いた実践のメリットを忘れ去り、作業を用いないことになる。

無意識に作業を用いることを避ける、あるいは作業を用いないことを肯定するのではなく、作業療法士が今の自分自身の実践における作業を基盤とした実践のメリット・デメリットを意識しながら、他職種とは明らかに違う専門家として、多くの人を魅了するあるいは必要される職業として認められる実践とはどうあるべきか考えてみてほしい。そうすることで、自然と、作業療法における作業を基盤とした実践の位置づけがどうあるべきかが見えてくる。

略歴

名古屋大学医療技術短期大学卒業し、名古屋徳洲会病院で作業療法士として働きながら、愛知大学法学部を卒業し学士号を取得。その後、老人病院および訪問作業療法での勤務を経て、作業療法とは何か自身ではっきりと説明できるようになりたくてコロラド州立大学大学院に留学する。ここで作業療法理論をしっかりと学び、作業を基盤とした評価法である **Assessment of Motor and Process Skills** に出会い、修士号を取得。帰国後、愛知医療学院専任教員、老人保健施設勤務となる。その後、茨城県立医療大学助手兼付属病院作業療法士をしている間に、作業科学という学問に出会い、改めて作業の知識の勉強と作業を用いた実践に関する研究をしたくて、大学を辞めて札幌医科大学大学院に進学し博士号を取得。のち茨城県立医療大学に再就職し現在教授。日本 **AMPS** 研究会代表および日本作業科学研究会監事。

自らの実践の経験を踏まえて、作業療法士一人一人が現在の科学的根拠に基づく正統な作業療法実践を行えば、クライアントに作業療法の良さを理解してもらえ、作業療法の価値や社会的な認知度が高まるはずであると確信している。一方で、なかなか進まない実践の現状をどうしたらいいか答えがだせないでいる。